4章　地域資源を活用した様々な農業・農村体験メニューづくり

1. 農業・農村体験の取り組み内容について教えてください。

農業・農村体験と言えば、だれもがまず田植や稲刈、野菜栽培などを思い浮かべるのではないでしょうか？しかし、そればかりでなく、農産物の加工や調理、道具づくり、家畜の世話、農家の生活体験など、他にも様々な活動があげられます。また、身近な「食」や「消費」といった視点から「農」を考える活動など、子どもたちが自分の生活とのつながりが見いだせる活動にすると、取り組みのおもしろさが高まります。

農業体験の活動は大きく、場所・もの・ひとに着目した次の３つのパターンがあげられます。

ひとつは、場所を主とした「フィールド型」で、田んぼや畑などの場所を主にした活動です。田んぼをビオトープにみたてた観察会やどろんこリレー、田おこしや畦づくり等の作業、そして米づくりや野菜の栽培などが活動例となります。

もうひとつは、味噌やわらじづくりなど、ものを主とする「ものづくり型」です。農産物の加工や郷土料理等の調理、生活道具づくりなどが活動例となります。

最後は、ひとの交流、ものの交換や流通等を主となる「ふれあい交流型」です。農家に泊まって生活を体験したり、農産物の出荷や販売への参加、家畜の世話、収穫祭などが活動例となります。

自らの地域と生活を取り巻く様々な資源を積極的に活用し、地域づくりに取り組むつもりで、いろいろな活動を企画してみましょう。

2. 周囲に田畑が少ない都市部でもできる体験活動メニューを教えてください。

都市部では農村部に比べ、農地や指導者等の確保が容易ではありません。農業・農村体験に取り組む際には関係者のさらなる工夫が必要です。大まかに次の２通りの対応が想定されます。

（１）田んぼや畑に相当する体験環境の工夫・創出

都市部の小学校ではプランターやバケツ、花壇等を活用し、米や野菜づくりに取り組んでいる例が多く見られます。近年は、敷地内でビオトープづくりに取り組んでいる学校も増えており、学校内のいろいろな場所を工夫してプチ農園を設ける方法もあります。

また、農業関係者の協力を得て、学校内に田んぼや畑を子どもたちも参加しながら作った例も見られます。田んぼや畑はかくあるべしといった発想を覆せば、ユニークな農地の出現が期待されます。

周辺や多少離れた市町村に農地を確保し、バスなどを使って移動しながら、体験に取り組んでいる例もあります。頻繁に通うことは困難ですが、回数を絞った活動と割り切るのであれば、こうした方法も可能でしょう。

（2）消費地である都市部の地域特性を活かした活動内容の工夫

農地の確保が難しい条件下では、農地を必要としない「ものづくり型」「ふれあい交流型」の活動を計画することも有効です。

「ものづくり型」の場合は、講師の確保等が課題となりますが、活動のスペースについては学校の体育館や家庭科室等の活用の他、公民館や地域の集会所、公共施設等の活用も考えられます。

「ふれあい交流型」の場合は、消費地である都市部の地域特性を活かし、商業施設や市場、直売所などの見学や取材などといった活動もおもしろいのではないでしょうか？例示した兵庫県葛西市立富合小学校では、農家グループによる農産物や加工品の直売活動を子どもたちが取材し、消費者へのリサーチや野菜づくり等に取り組んでいる活動が行われています。

また、都市部では農地を有効に活用しながら、消費地に近い（消費地を含む）条件を生かし、ハウスを使った施設型農業、一つの農地で年間何度も収穫する集約型農業等が行われています。こうした都市ならではの農業にふれることも良いテーマとなります。

3. 体験活動の計画を作成する際、検討すべき主な要素は何ですか？

子どもたちの農業体験活動を計画する際、他と同様に「いつ」「だれが（だれに）」「何を」「どこで」「どんな方法で」といった４Ｗ１Ｈについて検討することが基本となります。

（1）「いつ」

ここではいつ活動をするかといったことの他に、どれぐらいの期間、どんな頻度で取り組むかについて検討します。子どもたちにとって、体験が細切れでなく一環した活動となることが理想ですが、学校・地域の事情からすべてに取り組めない場合も少なくありません。栽培作目や活動内容を工夫し、活動を絞りながらも、全体のプロセスに触れられるような企画づくりを行いましょう。

（2）「だれ」を対象に（「だれ」が）

対象となる学校が小規模な場合、大規模な場合、学級・学年で取り組む場合、様々なケースが想定されます。学校側のマンパワー、地域の支援体制等を配慮して、実行可能な活動内容、期間、頻度等を検討しましょう。

(3)「何を」

活動内容は、期間や頻度、必要とする支援等と大きく連動します。農業・農村体験においては、栽培する対象の成長が季節や温度によって決まる部分が大きく、活動内容と活動時期は密接な関係にあります。また、学校が活動日を予定しても、その年の気候条件により、活動に適した日が微妙にずれるケースも少なくありません。あらかじめ、生き物や作物を相手とする柔軟な活動体制を検討しましょう。

(4)「どこで」

活動内容（例えば米作りなど）によっては、場の確保が活動内容を決める大きな条件になることも少なくありません。（圃場の確保が困難な場合は、プランターやバケツ稲作などで工夫こともあります。）農産物の加工や調理体験などでは、水場がある施設等が必要となります。また、活動規模に応じた場所や施設の大きさを検討することも必要となります。さらには、移動時間、安全性、トイレ、水場、資材置き場の確保等も場所を検討する際のポイントになります。

(5)「どんな方法で」

活動の内容が決まっても、どんな方法をとるかによって活動の在り方は大きく変わってきます。子どもたちに関与させる、主体性をひきだす活動とすることは、自分たちでやるより大変です。しかしながら、子どもたちのイキイキとした姿、喜ぶ顔に出会うために、子どもたちが関心を持ち、大変さを乗り越えながら、充足感を味わえるような活動にしたいものです。

こうした企画をつくる際に、文部科学省のホームページに掲載されている「総合的な学習の時間」応援団のページ（http//www.mext.go.jp./a__menu/shotou/sougou/）などを参考にすることも考えられます。ここでは、各学校において創意工夫して定める「総合的な学習の時間」の学習活動をはじめとして、各教科等においても活用できるよう、各省庁・関係団体等がそれぞれの立場から実施している学校の教育活動に対する様々な支援の内容、連絡先等が紹介されています。

4. 子どもたちの関心や地域の資源を活用しながら、体験活動メニューづくりを進める取り組みについて教えてください。

子どもたちの関心や地域資源を積極的に取り入れ、農業体験のテーマづくりをすすめる上で、次のような方法が考えられます。

（1）子どもたちと先生・関係者が地域を歩き、気づいたことや印象に残ったこと、関心を持ったことなどを白地図（点検地図）に記入したり、模造紙などに整理する

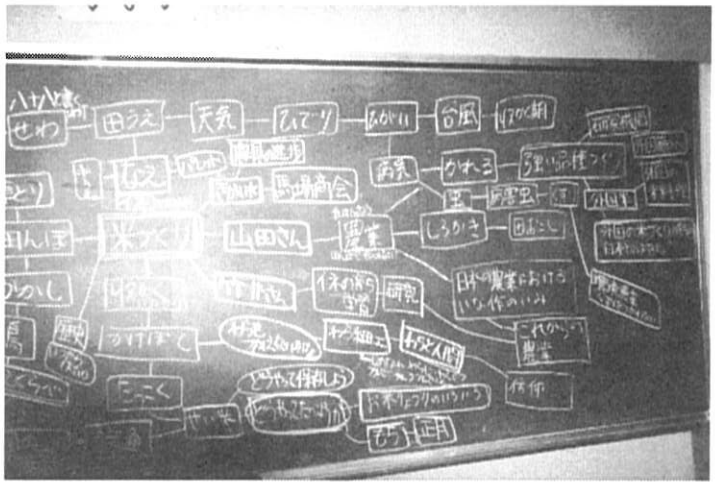
最近、まちづくり住民ワークショップなどでよく使われる方法です。まず、自分たちの地域を「農」や「食」といったテーマ（視点）を設定してグループで歩き、白地図等にそれぞれが気づいたことを書き込みます。次にグループ内で情報交換したり、印象に残ったことや疑問点をポストイットなど記入し模造紙に関連を考慮しつつ貼り込みながら、グループとしての情報や考え方をまとめる方法です。

（2）子どもたちや先生の知っていること、関心事などの要素を関連を考慮して書き連ね、つながりと全体像を表現するウェッビングマップづくり

ウェッビングマップは、設定したテーマから連想されるキーワードや要素を紙の上で書き連ねてゆき、それらのつながりや流れがクモの巣状に表現されるものです。

同作業を行うことで、子どもたちが楽しんで活動企画に参加でき、子どもたちの関心が取り入れられた活動づくりとすることができます。

また、教師や支援者がテーマに関してどのような学習内容があり、どんな活動が可能であるか、他教科等との関連や全体的な活動計画を考える上で有効な方法となります。



米づくりのウェッビングマップ作成例